



わたしの聖戦

女性が働くことについて

119

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

郷愁に浸る

10年くらい前は、よく海外へ出かけた。特にシアトルには、仕事にかこつけて何度か足を運んだ。同じ西海岸でも、ロスアンゼルスのような大都会とはまた違う、落ち着いた霧囲気に満ちていて、何となく安心感がある街だ。バスで3時間も走ればカナダとの国境を越えることができる、天気の良い日は、澄んだ空にそびえ立つ美しいレニア・マウンテンが目に見えつく。

短い滞在時はホテルを使ったが、少々長期間になるときはホームステイを経験した。路線バスで動き、スーパーで買い物をして、ゴミ出しもした。年配の女性の家であった

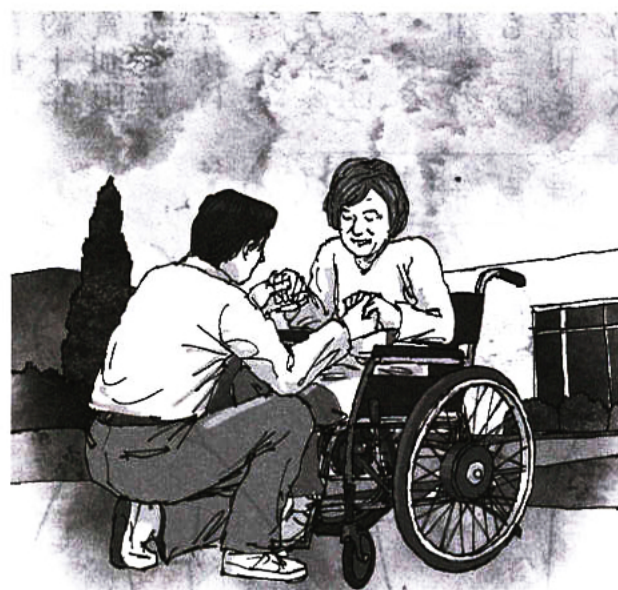
が、部屋をシェアするとははじめてだったので、何もかもが新鮮だった覚えがある。

仕事の合間を利用して、ナースिंगホームで介護のボランティアをさせてもらった。日本版介護施設といったところだ。といってもアメリカのライセンスは持っていないため、食事の配膳や介助、散歩やちょっとした身の回りの世話などが私の主な仕事であった。

ホームで暮らす人は、日系人がほとんどである。西海岸という場所柄当然といえば当然だが、日本語がほとんど話せない人も多く、ホーム内は片言の日本語とジャパニーズ

英語が入り混じった不思議な空間をかもし出していた。

一日のスケジュールは日本とさほど変わらない。食事ときにはホールに集まり、それ以外は映画を観たり、レクリエーションを楽しんだり、散歩をしたり。車いすの人がほ



とんどで、ほんの少しだけ、一日の大部分を寝て過ごす人がいた。日系といても、すでに3世4世であり、一度も日本の土を踏んだことがないという人も多かった。それでも、観る映画が「寅さん」や「任侠もの」であ

ることに驚かされた。ブラジルのサンパウロで日系の人々が毎朝ラジオ体操をするのを見たときのショックと同じだった。多くの人が、これまた程度の差はあれ認知症にかかっており、私は彼ら彼女らとの会話をじゅうぶんに楽しんだ。毎日会

っていても、朝顔を合わせれば初対面であるかのように挨拶をする。昨日聞いた昔話を話題にすれば、「何でそんなことまで知ってるの、あなた誰？」と不審な顔をする。いつも怒ったような顔でしかめ面していた人が、ある日突然心を開いて笑ってくれる。適度に身体を動かしていることもあって、私は自分でも意外なほど仕事が楽しく、日々満足していた。

ほしい」「あなたのような人がいたらとても力強い」と言ってもらえて、私は深く感謝した。どんな報酬より嬉しかった。もしあのとき、その言葉に従った決断をしていたら、今頃はどうなっていただろうと、ときどき想像を膨らませてみる。

私は、物事に対し、良くも悪くもあまり固執しない性質だ。もし飛行機が落ちて命を落とすことがあれば、なるべく行つたことのない、遠く日本から離れた国に近い海で朽ちたいと思っている。それでも、年のせいにか「郷愁」の感情に襲われることがままある。それは生まれきた場所や育つた土地に対する思いとはまた別に、たとえばシアトルの街の匂いやナースングホームの人々は私にとって懐かしくいとおしい。年を重ねる喜びはこんなところにあることを近頃つくづく実感する。

イラスト・伊藤栄章